日本IT書紀

018 かみよのかみ

02 溟渤篇
巻之二 鶏子

佃 均

© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳しい内容は
https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja でご確認ください。

第十八

かみよのかみ

一

以後、ほとんど連日のように業界関係者と会った。一九五〇年代のことを語ってもらうのでなく、それぞれにとっての「コンピュータことはじめ」を語ってもらった。

「独立系」と総称されるソフト会社の場合、多くがオーナー会社で創業者は健在であることが少なくない。そのインタビューを通じてヒントなり手がかりなりを得ることができるのではあるまいか。

つまり筆者の取材は人探しの追跡調査に近い。

インターネットで探したりもした。

奈良総一郎という人物はその中の一人である。

ソフトウェア産業振興協会と日本情報センター協会の母体の一つとなった「四社会」が一九六九年に発足する以前、日本電波塔ビルの中に計算センター事業者の勉強会があった。

日本電子開発の松尾三郎や構造計画研究所の服部正のことを追いかけている中で日本能率協会のＥＤＰ研究所が浮上し、その参加者の中に「奈良総一郎」という名前があった。

分かるのは名前だけである。

思いあぐねてＷｅｂサーチにインプットした。

すると出てきたのが「株式会社ナラコム」のホームページだった。「システム・ダイヤリー」というビジネスマン向けの手帳や、独自に開発した「ナラコード」を販売している。

――失礼ながら……。

と〈問い合わせ〉に書き込むと、数日して

「お探しの奈良総一郎は間違いなく私です」

という返事がきた。

東京・有楽町にオフィスを構えているという。

会ったのはＪＲ有楽町駅前の東京交通会館だった。

補聴器を付けてはいたが、大柄な体躯と活舌のいい低音は、名木田兵二氏と同様、矍鑠たる風情である。同氏から聞いた話はいずれ〈ＮＣＲ〉の項でまとめるとして、ここで語りたいのは筆者のインタビュー経過である。

こんな風にして一人ひとりを追いかけ、面会し、インタビューを重ねたのが本書の軸を成していると言っていい。ずいぶん前に現役を引退した人も筆者の名前を覚えていて

くれて、「おやおや、なつかしいね」と言ってくれたりした。

なかには前もって「自分史」を作って持ってきてくれたり、昔の社内報や自家製の小冊子、報告書、蔵書の社史などを貸してくれる人もあった。人と会うごとに新しい事実や確認を要する事項が浮かび上がってきた。

あるいは「そのことなら、こういう人に話を聞くといい」というかたちで紹介を受ける。そうしている間に五十人以上の〝証言〟が集まった。

こんなこともあった。

以前から親しくしている人に誘われて、銀座――というのは住所だけで、実際は有楽町に近い――のパブで開かれた会合に参加した。誘ってくれたのは、情報サービス関連企業に勤めている人である。そこで個々に紹介を受けた。

大学同期の仲間だという。

話しているうち、一人は大手商社の情報システム部長で、「入社したときからずっとシステムをやってきた」という。別の人は、「一九六五年からソフト開発に従事してきた」という。

大学で数学を専攻した人の集まりだったのである。

共通しているのは、当時は大学の数学科を出ても、就職先がなかったということだ。「でも」「しか」で教師になる人が多かった。

「ところが、自分たちが卒業した一九六五年には、あちこちの会社に電算部ができたときでしてね。一転して引っ張りだこになったものでした」

後日、取材を申し込み、ユーザーの立場、全社の情報システムを構築した立場、マイコン応用機器を設計した立場での話を聞くことができた。そうした人々のささやかな見聞録や武勇伝が、わずかながら時代の空気に味付けをするに違いない。

二

そうした中で、わたしの考えに変化が生じた。

――卒論の起点を一九五六年に設定するのは、どうも無理なようだ。

ということである。

なるほど一九五六年という年は、その前年に自由民主党と日本社会党の二大政党を中核とする「五五年体制」ができ、「もはや戦後ではない」と経済企画庁が宣言した年だった。

日ソ国交が復興し、日本の国際連合加入が承認され、戦後日本の大きな転換点だった。情報処理サービス産業の視

点でも、有隣電機精機が「ＦＡＣＯＭ１２８」を導入して〝わが国初〟の受託計算センターがスタートし、日本ＩＢＭが計算センターの設置を発表した年だった。

情報産業の幕が開いた。

そのことは間違いない。

ところが社会・経済の情報化――利用者が何を考え、どのような思想で計算機を導入し、システムを構築していったか――を語るとき、ＰＣＳ、すなわちパンチカード・システムの時代を描かないと、どうも話の流れがうまくつながらない。どんなに優れた計算機があっても、それを利用する考え方と技術がなければ、それはただの機械に過ぎない。

次のような記録が残っている。

太平洋戦争で日本の劣勢が明らかになった一九四四年の五月、国内に設置されていたパンチカード式統計会計機械装置（ＰＣＳ）は一千四百六十台（外地九十六台）、そのうち計算機本体に当たる分類統計機は百三十二台だった（『日本経営機械化史』（米花稔）による）。国の機関では陸海軍、鉄道、民間では保険会社や造船会社、航空機メーカーなどが使っていた。その大半は第二次大戦末期の空襲で、パンチカードもろとも失われた。

パンチカードが焼失したということは、データもプログラムも空中に消えたということだ。一九四五年八月十五日の時点で、日本における計算機利用の歴史は振り出しに戻ったと言っていい。

ところがその八年後の一九五二年十月はどうだったかというと、設置台数は一千七百七十六台、分類統計機は三百九十一台となっている。四四年五月の数字と比べ、装置全体で二一・六％増、分類統計機は約三倍という増加である。さらにのちの一九五六年十月になると、装置全体が七千二百五十一台、うち分類統計機は一千四百二十三台と飛躍的に増加した（『日本コンピューター発達史』南澤宣郎）。

経済企画庁が戦後からの脱却を宣言したのは、工業生産指数が第二次大戦前のピーク値を超えたためだが、こと計算機に関する限り、戦前をはるかに凌駕していた。

さらに時代が下った一九六二年になると、国別の計算機保有台数はアメリカが九千三百七十七台で群を抜いて多かったが、第二位は日本で五百二台、カナダが五百台で第三位、西ドイツが四百七十二台で第四位だった（前出『日本コンピューター発達史』による）。

太平洋戦争でこの国は壊滅的な打撃を受け、全国が焦土になったにもかかわらず、またたくうちに世界有数の計算機利用国に台頭した。

――戦後、なぜ日本の企業がこれほどまでにＰＣＳを積

極的に採用したのか。

これを解明しないことには、一九五六年以後の「情報化」を語ることはできないように思えてきたのだ。そうこうするうち、見慣れていたはずの資料からＰＣＳにつながる文字が「明治二十五年」の年紀を持って現われたのである。

三

それはまさに突然のようだった。いや、目にしたのは初めてではなかった。業界の昔の出来事を調べるとき、手にすることが少なくなかった。情けないことに、まったく見落としていたのだ。

そこに次の一文が記されていた。

明治二十五（一八九二）年五月、高橋二郎、『統計集誌』第一二九号誌上に「人口調査電気機械の発明」と題し、ホレリス式ＰＣＳを初めて紹介。

資料というのは、日本ＩＢＭが一九八八年（昭和六十三）に創業五十年を記念して編纂した『情報処理産業年表』である。企画・編集は財団法人・日本経営史研究所であって、同じく同研究所が企画・編集に当たった『日本アイ・ビー・エム５０年史』とセットで関係者に配布された。非売品であるため、現在はほとんど入手が難しい。

同じページの最下段に一九二〇年（大正九）のこととして、

国勢院、ホレリス式手動穿孔機と手動検孔機一台ずつ購入

とある。

見開きの右側ページに、解説が載っていた。

大正九年五月、国勢院が設置され、同年十月に第一回国勢調査が実施された。この年の八月に国勢院がホレリス式統計機を輸入したのは、本格的で全般的な調査が、統計処理の機械化に重要な契機となったことを示している。もっとも、この調査で機械集計が使われたのは人口五千六百万人のうち八百三十万人で、人手集計に比べ能率は約四倍であった。国勢調査は、これ以後五年実施されている。ちなみに、第一回国勢調査の大正九年には、ＧＮＰは推計百五十九億円、産業別の有業者数は、下図の通りで、第一次産業が過半を占め、この面からは農業国という様相を呈していた。

（米花稔『日本経営機械化史』ｐ19）

（筆者注：文中の「下図」は省略した）

この記事が掲載されていたのは第八―九ページである。そこから本編が始まっていたのだが、『情報処理産業年表』はＡ４判変形、全三百六十四ページのずっしりした書籍である。冒頭にある口絵の続き、という錯覚があった。そのために見逃していたのだった。

見つけたとき、

――まいった。

と思った。

有体にいえば「あちゃ～」である。

明治二十五年……。

『日本書紀』は、國常立尊から天孫人皇彦火火出見尊にいたる「神代」を上・下に分け、

――古天地未剖、陰陽不分……

で始まる初巻を「かみよのかみ」と称する。

コンピュータないし情報サービスの産業にとって、明治二十五年に統計会計機械装置について論文をまとめた高橋二郎という人物は、初生神・国常立尊に相当する。まるで「かみよのかみ」ではないか。

どこから手をつければいいのか……。

日本IT書紀　018 かみよのかみ

著　者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会
http://www.ossaj.org/
info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。

© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳しい内容は https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja でご確認ください。